
FLORA KANAGAWA

Oct. 31. 1990 No. 29
神奈川県植物誌調査会ニュース第29号

〒231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 045-201-0926・振替 横浜 3-10195



箱根駒ヶ岳のホソバナアマナ

ホソバナアマナ *Lloydia triflora* Baker は神奈川県植物目録 (1933) や神奈川県植物誌 (1958) に「箱根」の記録がありますが、植物誌調査では確認されていませんでした。内田藤吉先生より箱根駒ヶ岳で撮影された写真を提供していただきました。昨年、茅ヶ崎植物会で駒ヶ岳を訪れた際に会員の方が見つけられたものだそうです。

箱根のサワオトギリとその周辺の問題

(城川四郎)

神奈川県ではサワオトギリの分布が箱根周辺に限られている。コオトギリもやはり箱根にしか分布しないが分布個体数はコオトギリの方がずっと多い。そのためか植物誌調査会で集められたコオトギリの標本はかなりあるがサワオトギリの標本は比較的少なく、しかもどの個体も貧弱である。というのは採集してくださった方への恨み言では決してない。実は「神奈川県植物誌1988」937ページのサワオトギリの果実の図を極めて不正確に書いてしまった私の弁解である。昨年、高橋秀男先生に国立科学博物館筑波植物園加藤氏の論文サワオトギリ群 (*Hypericum pseudopetiolum* Complex) の分類学的研究を見せて頂くまでは箱根のサワオトギリはいわゆるソハヤキ型で、標準的なサワオトギリとして認識している日本海型とは果実の形に対照的な相違があることに私は全く気がついていなかった。加藤氏の研究で明らかにされたものであるが、もしサワオトギリの果実の図を書くときにたくさんのサワオトギリの標本に目を通す時間と努力を惜しまなければ私にも気がつくことができたかもしれない。しかし、私の頭の中の「サワオトギリの果実は幅広く太いものという固定観念」が頑固なものだったので、その形にもっとも近い果実を選んで描いた結果がもっとも箱根のサワオトギリらしからぬ図になってしまったわけである。

加藤氏の研究によればサワオトギリ群は九州北部と紀伊半島、静岡県、関東地方を除く本州の大部分、北海道の南部に広く分布する日本海型と九州の大部分、四国、紀伊半島、伊豆半島を含む静岡県の南部および箱根に分布するソハヤキ型と箱根周辺に分布するコオトギリの3型に分けられるという。従って箱根はソハヤキ型の北限であり、コオトギリ型との重複分布地でもある。この3型を4つの形質について比較した加藤氏の研究結果は次のようである。(表現法は多少変えてある)

	日本海型	ソハヤキ型	コオトギリ型
果実の形	丸味が強い	細長い	細長い
萼の有柄腺	ある	ない	ない
花柱	2.5 mm以下	2.5 mm以下	3 mm
萼の黒線	ほとんどない	ない	かなり多い

この研究結果を検証する意味で日本海型分布域の栗駒山麓世界谷地で採集したサワオトギリ、箱根屏風山のサワオトギリおよびコオトギリの3者について調べてみると図のように加藤氏の研究結果と一致した。そこで「神奈川県植物誌1988」937ページのサワオトギリの果実の図は本文の図に訂正して頂きたいと思う。

なお、コオトギリ (*Hypericum hakonense* Fr. et Sav.) をサワオトギリ群 (*Hypericum pseudopetiolum* Complex) の一員とすることについては葉形の明らかな相違や黒腺の分布状況などから納得しがたいように思われるが今後検討を続けてみたい。丹沢のクロテンコオトギリもそれに関連した問題である。加藤氏は論文のなかで箱根、伊豆地方でソハヤキ型サワオトギリとコオトギリは分布域が重なっているがこの2種類の植物が同所的に生育しているのは見つかっていないと記している。しかし、本稿の図の資料に用いたサワオトギリとコオトギリは数mしか離れぬ同じ階段斜面に生育していたものである。

神奈川県のオトギリソウ類は他にも神奈川県植物誌937ページに記したハマオトギリが検討中であり、ミドリアゼオトギリはその後消息がない。アゼオトギリについて採集リストのなかに記されているのを見たことはあるがまだ標本を確認していない。ハマオトギリについては千葉県安房小湊の海岸で大場達之先生が観察されたとの情報を頂いた。

「神奈川県植物誌1988」のヤブマオ類の図について

(城川四郎)

前回のフロラカナガワと一緒にお届けした私の研究報告「神奈川県産ヤブマオ属の検討」によってもある程度おわかり頂けると思うが「神奈川県植物誌1988」576ページのメヤブマオの図は私の研究報告でミツゲメヤブマオと仮称した種類である。佐竹氏のオオメヤブマオにあたるものであろうと思われるがヤブマオ類専門家の矢原氏はオオメヤブマオとメヤブマオは同じものとの見解をとっておられるので名前の混乱を避けてミツゲメヤブマオと仮称した。他のヤブマオ類と識別しやすい種類である。個体数は多くないが山際で見ることが多い。奈良県の赤目でも観察することができて広く分布していることを知った。

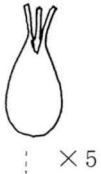
577ページのメヤブマオは私の研究報告の仮称サガミヤブマオである。ヤブマオとしては重鋸歯が少なく、ときには全く重鋸歯を欠くので鋸歯片が素直に伸びている。まだ神奈川県内でしか見していない。どちらも葉形だけでなく葉裏の毛の状況にも特徴がある。

573ページのアカソの図は矢原氏がアカソモドキと仮称され、アカソとクサコアカソの雑種起源の植物であろうとされたものであるが私の研究報告ではハコネアカソと仮称したものである。同じ573ページのクサコアカソの図は佐竹氏の論文にあるクサコアカソのタイプ (*Boehmeria paraspicata* NAKAI) の写真によく似たものを選んで描いたが、これはクサコアカソの標準的な葉形ではないから植物誌の図としては不適當であった。

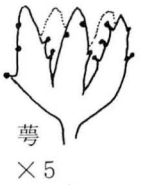
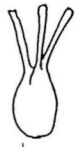
同じく573ページのコアカソの図は無配生殖型のコアカソである。有配生殖型のコアカソの葉形は私の研究報告の85ページを見ていただきたい。

ヤブマオ類についてはまだ解明すべき問題が山積しているがこの研究を前進させるためには多くの標本が何よりの力になる。今後とも標本と情報をお寄せ頂ければ有り難い。

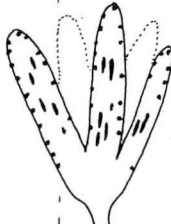
子房と花柱



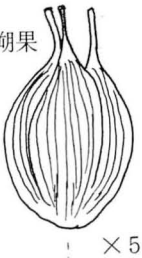
×5



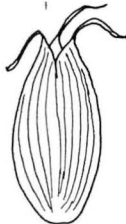
萼
×5



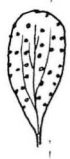
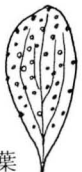
朔果



×5



葉
×1



東北地方
栗駒山産
サワオトギリ

箱根産
サワオトギリ

箱根産
コオトギリ

横浜市緑区で見つけた *Scirpus* 2種について

(北川淑子)

1990年5月21日、28日と続けて、横浜市緑区内で随伴渡来種と思われる新産および神奈川県新産の*Scirpus* を見つけたので報告する。

1. ヒメクロアブラガヤ (新称)

Scirpus microcarpus Presl.

1990年5月21日、東京工大の鶴見実先生のご案内で、横浜市緑区長津田町(Nagatsuta-Cho)にある東京工業大学構内をシダ植物調査のために、小崎昭則、勝山輝男両氏とともに探索させていただいた。その折りに、湿地を埋め立てた低い土手に見慣れない*Scirpus* の小群落を目撃した。付近には吹き付けに使われたらしいオニウシノケグサ等が生えており、クロアブラガヤの仲間が随伴渡来したものと推定し、数株を持ち帰った。

三人でそれぞれ検討したところ、北米大陸北東部、五大湖周辺及び、南西部の各州の沼沢地や湿った採草地等に広く分布する*Scirpus microcarpus* Presl. に該当するものと意見が一致した。後日、栃木県在住の野口達也氏から、6月14日に黒磯市西岩崎にて同様の植物を採集した旨の私信と関連資料のコピーをお送りいただいた。同植物の標本も見ることができ、長津田町で採集した植物と同一種と判明、和名は野口氏とも相談してヒメクロアブラガヤとした。

<特徴>

草丈は60~76cm。縦横にひろがった地下茎の所々から一本ずつ茎を伸ばす。茎は高さ32~62cm、3~6節あり、円柱形に近い。節部と葉鞘は紅色を帯びている。葉鞘はややゆるく茎を包み、長さ2~7cm。

葉は5~10数枚つく。葉の長さは花序をつけた株では40cm前後になるものが多く、花茎の出ない株では70cm近くになるものも見られる。葉の幅は5~9.2mmで、花序をつけない株の葉は全体に細くて長い。上方の葉はしばしば花序を超える。葉の縁と下面中央脈はざらつく。

花期は5月頃。散房花序は大型で数回分枝し、枝先に1~8(~21)個の小穂が団集した分花序をつける。末端の花序の枝はざらつく。基部の苞葉数枚は葉状で長い。

小穂は先の尖った卵状楕円形で、黒味を帯びた

緑色。熟すと黒味が増す。長さは3~6mm位、幅1.5~2.5mm位。

鱗片は長卵形または広卵形で、長さ1.6~2.2mm、幅0.8~1.5mm。透明感のある薄い膜質で、中央部を除いて、黒い縦すじと細かい斑があり、全体が黒っぽく見える。中央脈は緑色。熟したものでは褐色を帯び、その先端は短く尖る。

刺針は3~6本あり、大半は4本。長さは果体のはほぼ半分から1.5倍位。大多数は果体よりやや長い程度で、下向きの小刺針(逆刺)がある。雄しべは2本(時に3本)で、花糸は3mm前後、葯の長さは1.2~1.5mm。雌しべは長さ2mm位。花柱は赤褐色で0.1~0.8mm、柱頭は2個(稀に3個)。瘦果は長さ1~1.2mm、幅0.8mmほど。倒卵形または広卵形で、平凸形または平たい両凸形。上部には短い突起がある。果体の色は白に近い淡い緑色。

2. イワキアブラガヤ (セフリアブラガヤ型)

1990年5月28日、鶴見川中流域の落合橋付近の河川敷(上山町)でマツカサススキを小振りにした感じの*Scirpus* を1株発見した。外来種ではないかと思われたので、株分けして一部を持ち帰った。その後、5月31日、6月1日、10日と周辺で合計8株を見つめることができた。すべて鶴見川の高水敷(海拔8~9m)に見られ、サンカクイやメリケンガヤツリの生える多少湿り気のある場所(上山・中山・佐江戸町)及び澱んだドブ状の溝沿い(佐江戸町)に生育している。落合橋付近の左岸側高水敷には飼料用と思われるネズミムギ類を主体とする牧草地があり、この*Scirpus* はすべてその地点の対岸または下流側に見られることから、牧草に混じって渡来したものと推定された。

細部の観察をすると共に後記の文献を調べたところ、鶴見川産の*Scirpus* は1980年に福岡県福岡市早良区板屋、背振ダム左岸で益村聖・筒井貞雄両氏によって発見され、セフリアブラガヤと新称(筒井, 1983a)、後にイワキアブラガヤ(筒井, 1983b)とされた植物と同一のもののように思われた。しかし、鶴見川産と福岡産には福島産のイワキアブラガヤに見られるようなはっきりした刺針は見られないため、セフリアブラガヤをイワキアブラガヤとして良いものかは疑問が残る。

また、小山(1958)によるとイワキアブラガヤは北米産の *S. atrovirens* Willdenow var. *georgianus* (H.) Fernald に当たる。

ヒメクロアブラガヤ (新称)



「北米東南部に分布する *S. georgianus* Harper と同一物で、結局は *S. Hattorianus* Makino に当たる。」(筒井, 1983b) とされているが、*S. atrovirens* 類の分類群については、未整理の部分があるように思われるため、学名については保留させていただく。

<特徴>

草丈90~150cm位の多年草。短い根茎でつながったゆるい株をつくり、次第に大株となる。茎の断面は鈍い三角形で、表面はなめらか。5~8節あり、節部は褐色を帯びる。

葉は広線形で、長さ20~45cm位になり、中央部の葉幅は5~11mm。葉の縁と葉の下面中央脈はざらつく。上方の葉は花序を超えることがある。下方の葉には1mmの幅の間に3~4(~6)本の葉肋が通り、葉肋と葉肋を結ぶ横小脈がある。葉鞘は筒状で緑色、多少ゆるめに茎を包んでいる。長さは2.5~6.5cm位。

花期は5月末~6月。茎頂に小穂の団集した分花序が形作る散房花序を1つ(稀に2つ)つける。長さ3~10cm、幅3~5.5cmほどで、全体が淡い緑褐色に見える。花序の柄はなめらかな円柱状。よく発達した葉状苞を数枚持つ。

小穂は5~30(~41)個が団集し、径3~8mmの分花序をつくる。1花序中に数えられる分花序は55~90個位である。各々の小穂は卵形で緑褐色、長さ1.5~3mm、幅は1~1.5mm位。

鱗片は広い楕円形または倒卵形で長さ1~1.5mm、幅0.8~1mm。竜骨部分は緑色を帯びるものが多く、中央部は透明。その他の部分は透明感のある膜質の地に黒い斑が全体に散らばり、芒を含めた先端1/3~1/4位の部分は褐色がかっている。

刺針は無いものが大半を占め、時に痕跡程度、または稀に果体の1/3~1/4長の刺針が1~3本見られることがある。逆刺は見られない。雄しべは3本(稀に2本)で、花糸は1.2~1.8mm。葯の長さは0.8~1mm。雌しべは長さ0.8mm位。花柱は赤褐色で短く、柱頭は3個。瘦果は長さ0.8~1mm、幅0.5mmの偏3稜を成す楕円形で、上部は短いくちばし状になっている。果体の表面は透明感のある薄緑色で、熟すと中の種子が黄土色に透けて見える。

なお、果実が成熟する頃になると、花序から芽生する性質が表れた。7月11日、25日と現地を訪れたところ、8株のうちで刈り取られたり、踏み

つけられたり等のアクシデントのなかった5株すべての花序に福岡県産(筒井 No. 28450: KPM 76997)と同じ芽生する特徴が認められた。25日には倒伏した茎の節より芽生している例も見られた。

<最後に>

報告をまとめるにあたり、筒井貞夫氏より福岡産のイワキアブラガヤ(セフリアブラガヤ)の標本及び原記載類のコピーを、野口達也氏、庄子邦光氏からは貴重な文献資料とご助言をいただいた。また、国立科学博物館の金井弘夫、中池敏之両先生には標本閲覧に際し、ご便宜を計っていただいた。心よりお礼申し上げる。

<文献>

- Gleason H.A., 1952: The New Britt. and Brown Ill. Fl. of the Northern U.S. and adjacent Canada. vol. 1. (p.277)
- Harper, 1900: Flora of Middle Georgia. Bull. Torr. Bot. Club, 27. (p.331)
- Mason H.L., 1957: A Flora of the Marshes of California. (p.307), Univ. of California Press.
- 福島県植物誌編纂委員会編, 1987: 福島県植物誌 (p.5, 206)
- Koyama T., 1958: Taxonomic Study of the Genus *Scirpus* Linne, Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo 3, 7 (6): 271-366. (p.347-348)
- Makino T., 1933: Journ. Jap. Bot. 8:44-45
- 牧野富太郎, 1966: 牧野新日本植物図鑑(p.767)
- Mohlenbrock R.H., 1976: The Illustrated Flora of Illinois. Sedges cyperus to scleria. (p.107-137), Southern Illinois University Press.
- 村田 源, 1975: 植物分類, 地理, 27:28.
- Ohwi J., 1944: Cyperaceae Japonicae II Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ. B, 18:1-182. (p.103)
- 筒井貞雄, 1983a: 福岡県のカヤツリグサ科植物子報(1). 福岡の植物 8:69-119.
- 筒井貞雄, 1983b: 九州新産のイワキアブラガヤ 福岡の植物 9:113-115

イワキアブラガヤ

- a : 果実と雌しべ
- a : 果実と刺針
- b : 雄しべ
- c : 鱗片
- d : 小穂
- e : 分花序
- f : 葉先
- g : 葉鞘の口辺部



1990年5月28日
横浜市緑区上山町採

スケールは1mm

全体図 (×0.5)

植物誌発刊後に記録された植物 (4)

(勝山輝男)

今年のシーズンもあとわずかですが、この夏も大きな収穫がありました。第一は珍品ムカゴサイシンの発見でしょう。また、帰化植物のニューフェースもあらわれています。全号に引続きその一部を報告します。

ムカゴサイシン *Nervilia nipponica* Makino

伊豆七島、九州、琉球の常緑樹林下に生える小型の地生ランです。以前、東京目黒の林業試験場に生じたそうですが、これは本来の野生のものかどうか不明でした。むさしの山草会の星寛治氏から写真を送っていただき、横須賀市 (YO-5) にムカゴサイシンがあることがわかりました。8月25日に、氏に案内していただき会員の小崎昭則氏と現地を見に行きました。マテバシイ林の林床の落葉の間で葉をつけた個体を1株だけ見いだしました。来年の春には花を見たいと思っています。花期は5月下旬頃、花がすんでから五角形のランらしくない葉を出します。落葉の間に生えているので、花も葉もきわめて目立ちません。星寛治氏の目のよさに感心いたしました。

サツキ

Rhododendron indicum (L.) Sweet

神奈川県には中津渓谷だけに自生が知られていましたが、道志川や相模川でも見つかりました。植物誌1988では KI-2, AI, TS-5, HAK-5 に◎がありますが、KI-2~TS-5 はいずれも中津渓谷で HAK-5 は栽培品と思われるものです。相模川では相模ダム下流の渓谷に、道志川では青山の鮎子取水堰から上流の渓谷に点々と分布しています。したがって相模湖 (SAG)、藤野 2 (FUJ-2)、津久井 3 (TS-3) に◎が追加になります。中津渓谷の産地が宮ヶ瀬ダムのために失われることが確実であるだけに、道志川や相模川でサツキの分布が確認できたことは喜ばしいことです。

ナツフジ *Milletia japonica*

(Sieb. et Zucc.) A.Gray

会員の田中京子さんが自宅近くの港南区上永谷の山林で見つけられました。植物誌調査でも記録されていません。東海道以西に分布するマメ科の藤本で、神奈川県植物目録 (1933) や神奈川県植

物誌 (1958) には「栽培」とされています。今回見つかったところは、山林の斜面でとても栽培していたものとは考えられないそうです。栽培していたものの種子が運ばれたとも考えられますが、杉本 (1984) : 静岡県植物誌には御殿場や沼津の記録があるので、神奈川県に分布があっても不思議ではありません。出口 (1968) : 横浜植物誌にも「上柏毛の崖地に小群があり、よく結実する」とあります。上柏毛がどこか不明ですが、上柏尾の誤植のような気もします。上柏尾なら上永谷のすぐ隣りです。案外このあたりには以前から自生していたのかもしれない。

ハガワリトボシガラ

Festuca heterophylla Lam.

ヨーロッパ原産の帰化植物で神奈川県新産。会員の北川さんと小崎さんが緑区恩田町 (MI-1) の宅地造成地で採集されました。下方の葉は糸状で幅 1~3mm 程度ですが、花茎の葉は幅広く 5~10mm あります。下方の葉と花穂だけ見ると一見オオウシノケグサのように見えるので、見逃しているかもしれません。城川先生の情報によると表丹沢小丸山頂で採集されたそうです。来春は注意して探してみてください。長田武正著、日本イネ科植物図譜 (平凡社) p.115 に図がのっています。

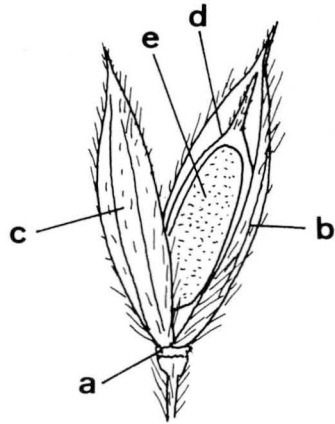
アメリカノキビ (新称)

Eriochloa contracta Hitchc.

8月に中区の新港埠頭で見かけたことのないイネ科植物を採集しました。一見すると、イヌビエ属かなと思いましたが、第一苞穎がほとんど退化しているのでナルコビエ属 (*Eriochloa*) と考えました。日本にはナルコビエの他には琉球にムラサキノキビ (ノキビ) *E. procera* (Retz.) C.E.Hubbard. が分布しています。ムラサキノキビと小穂の形はよく似ているのですが、花穂が太く、小穂もやや大きいので異なります。そこで Hitchcock の *Manual of the Grasses of the United States* で調べたところ、北米のテキサス、ルイジアナ、アリゾナ、コロラドなどに分布する *E. contracta* と判明しました。新港埠頭のその付近では輸入干し草の袋詰め作業が行われています。それに紛れて日本に一時帰化したものと推定されます。

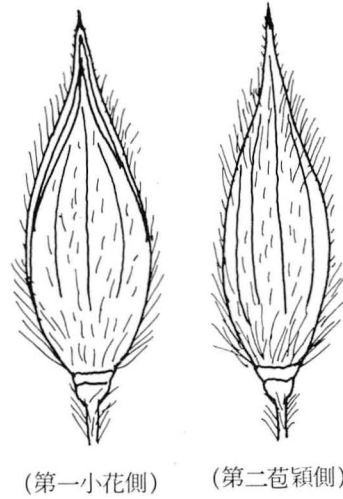
葉は幅 5mm 前後、葉鞘とともに細毛があります。円錐花序は長さ 10cm 程度、分花序は主軸に圧

着し、長さ1~2cm、全体に細毛が密生しています。小穂は長さ3.5~4mm。第一苞穎(a)は退化してどこにあるかよくわかりません。イヌビエやスズメノヒエでも同様なのですが、第二苞穎(b)は小穂と同長、第一小花が護穎だけに退化し(c)、第二小花(d:護穎、e:内穎)のみが結実します。したがって、第二苞穎が第一苞穎に、第一小花が第二苞穎のように見え、中に1小花のみあるように見えます(植物誌1988ではこのようなイネ科のグループでは第一苞穎を第一穎、第二苞穎を第二穎、第一小花の護穎を第三穎、第二小花の護穎を第四穎と呼んでいます)。第二苞穎(b)、第一小花の護穎(c)ともにほぼ同長で全体にやや長い毛があり、先端は短いぎになります。第二小花の護穎(d)は硬く、長さ2~2.5mm、滑らかで先端は長さ1mm程度のザラついたノギになります。

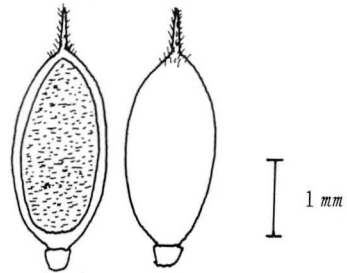


小穂を少し開いたところ

- a : 退化した第一苞穎
- b : 第二苞穎
- c : 第一小花の護穎
- d : 第二小花の護穎
- e : 第二小花の内穎



小穂



第二小花

神奈川県種子植物補遺(1)

(小崎昭則)

オキナワジュズスゲ

一昨年、栃木県の野口達也先生から、南関東の常緑樹林下にジュズスゲに似たオキナワジュズスゲという種類があるから注意するようにとのご連絡をいただいた。間もなく、調布市の都立神代植物公園に多数生育しているのに気がついた。各地からの献木、移植木の多い植物公園という特殊事情はあるものの、その繁茂ぶりから、県下の産を固く信ずるところとなった。今年に入り、県・横須賀市・平塚市の3つの博物館で標本の見直し作業を進めた結果、4点が見つかった(根本 平氏: 藤沢市城南FU- 3, 1980.5.18: FKS.23379)

(三輪徳子氏: 茅ヶ崎市赤羽根 CH- 1, 1981.5.8: FKS.23376) (守矢淳一氏: 伊勢原市日向, 1981.5.22: FKS.23377) (濱中義治氏: 鎌倉市十二所 1984.5.28: No.74183: 勝山先生とともに確認)。

※ FKS は平塚市博所蔵, No. は県博所蔵の神奈川県植物誌標本を示す。

オキナワジュズスゲ *Carex ischnostachya* Steud. var. *fastigiata* T. Koyama は、沖縄本島産の標本をもとに小山鐵夫先生が1956年(植雑 69: 211)に記載した変種で、基準変種ジュズスゲと比べ、①果胞が小さいこと(2.8~3.5mm長。ジュズスゲでは5~6mm)、②上部3~5つの小穂がほぼ同じ高さで接するように立ち上がること(変示種名の*fastigiata*はこの性質による)、③全体にほっそりとしていることなどが特徴とされる。しかし、小山先生が後の図鑑類に紹介されなかったことや他の図鑑類でもほとんど取り上げられなかったことから、分布域が広い割に地方植物誌などに登場していないのが実情である。本種を丁寧な観察と多くの引用標本に基づいて慎重に取り上げたのは、福岡植物研究会の益村 聖先生らで、その成果は同会発行の『福岡の植物 No. 8』(1983.6)、『福岡の植物No.9』(1983.12)に詳しく報告されている。

県博に所蔵されている多数の西南日本産の標本や、都下新島、静岡県磐田市における観察から、東海地方や伊豆諸島辺りまではほぼ連続的に分布しているのではないかと考えている。横浜市南部~三浦半島や湘南~小田原方面にかけての社叢やそれに類するような環境での調査が待たれる。

野外で見つけ出す場合のポイントとしては、①~③の他、生育環境(‘オキナワ’は沿海地~低山地のあまり湿っていない林内、林縁に生える…福岡の植物 No. 9)、果胞に対する鱗片の相対的な長さ(ジュズスゲは約1/4, ‘オキナワ’では約2/5)、鱗片の形(ジュズスゲは円みがある)、茎の基部の鞘の色(‘オキナワ’では長く紅紫色を帯びる傾向があるのに対し、ジュズスゲではほとんど紅紫色を帯びないか、帯びてもその部分はごく短い)、果期のずれ(‘オキナワ’の方が少し早く熟す傾向がある)などがあげられる。

イセウキヤガラ

本種は極東地域の太平洋側に分布し、国内では北海道から九州北部にかけて産地が点在する。生育地は、満潮時に水没し、干潮時に干上がるような河口付近で、シオクグ帯以深の砂泥地に単一群落を形成することがよく知られている。本県では『植物誌' 88』によって多摩川河口に生えることが明らかにされたが、最近、①横浜市緑区(MI-2)、②三浦市においても記録することができた。どちらも本種の生育地としては注意されにくい環境であることから、ここに紹介する。

①は佐江戸町の鶴見川河川敷に生えていたもので、5月31日に北川淑子氏にセフリアブラガヤ(筆者の見解)をご案内いただいた際、気づいたものである。確認地点は河口(JR東海道線の鉄橋付近)より19kmほど遡った直接海水の影響を受けない左岸高水敷(海拔約8~9m)で、発見当初、付近一帯には攪乱を受けて間もない感じの地表の現われた部分が散在していた。生育地は少し凹んだ小規模な水溜まり(夏には完全に干上がった)で、すぐ近くまでヒメガマ・ヨシなどの高茎多年草が迫っていたが、その部分だけは地面が顔をのぞかせていた。生育範囲は5m×2mほどで、多生するメリケンガヤツリ・タタラカンガレイ・サンカクイなどに混じって疎らに稈を伸ばしていた。同じ所にマツバイ、ごく少数のカンガレイ・ホタルイも見られた。通常の河川管理を前提とした遷移の進行を考えると、この小群の維持、発達はとも期待できない状況であるが、本種の分布を生態的側面から捉えようとする場合には記憶に留めておきたい例である。

②は6月14日、毘沙門石船の毘沙門湾~宮川湾間で山本 明・大森雄治両先生とともに見つけた

ものである。付近一帯は比高10~30m位の海食崖の下に起伏の小さいテラス状の磯がみられるところで、本種は潮の干満の影響を直接受けられないような波打ち際より離れた小さな凹地（風の強い時にだけは飛沫のかかるような場所）に合計5カ所、1~7㎡程度の単一の小群を作って生育していた。

神奈川県シダ植物補遺（2）

（小崎昭則）

コヒロハシケシダ

芹沢俊介先生が1973年に正式発表されたシダで、千葉県市川市が基準産地になっている（東京都高尾自然科学博物館研究報告 第5号）。同時に発表された基準変種フモトシケンシダと比べ葉がやや小さく、葉身は長三角形から三角形、胞子のう群をつけた葉で長さ10~20cm、幅7~10cm。羽片はやや深く切れ込み、裂片はまばらにつく。葉の多細胞毛がやや少ないことなどが特徴とされ、茨城県~静岡県東部までの比較的狭い範囲に点々と分布が記録されている。この時に引用された主要標本の産地の中に川崎市柿生や本県に隣接する都下八王子市の名があったことから、県博所蔵標本の見直し、補足調査を行ったところ、次のような産地を追加することができた（平松俊子氏・井上香世子氏・松浦正郎氏・内藤美知子氏・吉川アサ子氏・大場達之氏：箱根町芦ノ湖HAK-2, 1983.8.30: No. 54163）（勝山輝男氏：箱根町冠岳 HAK-4, 1983.9.4: No. 54174）（勝山輝男氏：箱根町明神ヶ岳 HAK-6, 1983.9.23: No. 54175）（長谷川義人氏：南足柄市金時山 MIA-1, 1984.6.9: No. 54164）（山本 明氏：横浜市瀬谷区二ツ橋町, 1985.8.31: No. 54173）（筆者採集：横浜市旭区上川井町 AS, 1990.8.21: A. 6697）,（筆者採集：横浜市緑区三保町 MI-1: A. 6698）2例とも小群で1カ所ずつ。

※ A. は筆者のオリジナル整理番号

コセイタカシケンシダ

県下における両親の混生地は多いが、『植物誌'88』の標本として県博で確認できたのは（採集者不明：津久井 明日原 TS-5, 1980.8.3: No. 54530: 中池敏之先生同定）の1点（実葉1枚）と清川村（KI-2 科博）の引用記録だけであった。このほど、横浜市緑区・旭区のシケンシダ類を



AKINORI OZAKI 植物標本 No. 6697	
種名:	
<i>Asplenium pseudocostalis</i> (Suzowana) Suzowana var. <i>subulfoideum</i> (Suzowana) Suzowana	
コヒロハシケンシダ	
採集地: 神奈川県横浜市旭区上川井町	
5万地図	横浜-3 海拔 76 m
採集年月日: 1990年 8月 21日	丘陵の上部付近... 緩斜面に生ずる。旭区の上川井町に産地がある。
採集者: 小崎昭則	
備考:	野澤正幸

